

令和 7 年度

「集落自主活動に係る伴走支援事業」

業務実施報告書



福島県田村郡三春町貝山地区

東北大学福興 youth

1 はじめに

弊団体「東北大学福興 youth」は、2013 年から福島県浜通りを中心にさまざまなボランティア活動を行ってきた団体である。本事業には令和 5 年度から取り組んでおり、昨年度はしいたけを観察できるアプリ「My しいたけ観察日記」の開発や貝山地区での交流会を実施した。

この報告書では、我々が事業を実施させていただいた三春町貝山地区の概要、事業の背景・目的、今年度の事業内容および今後の展望についてまとめている。

2 三春町貝山地区の概要

福島県田村郡三春町は、中通り地域のほぼ中央部に位置する、人口約 1 万 6000 人の町である。主要な特産品としては三春駒、三春張子人形、ピーマン、ブルーベリーなどが挙げられ、樹齢約 1000 年を超える天然記念物の三春滝桜には毎年春になると多くの観光客が訪れている。東日本大震災の際には、浜通り地域から多くの避難者を受け入れ、町独自の判断で安定ヨウ素剤を住民に配布し、服用を促した唯一の自治体である。また、東北大学理学部と共同で、原発事故に対する草の根レベルでの取り組みを展開し、収集した情報や分析結果を広く共有することを目的とする「三春“実生”プロジェクト」が 2011 年から進められている [1]。

貝山地区はこの三春町の南西部に位置し、令和 2 年国勢調査によると、貝山字宮ノ前の人口は 563 人、農業従事者は 11 人となっている [2]。



図 1 三春町の位置 [3]

3 事業の背景・目的

3.1 三春町の農業従事者の減少

三春町では農業従事者の減少が課題となっている。

2024 年版三春町町勢要覧によると、図 2 に示すように農家総数は 5 年ごとに約 1 割減少しており、近年はその減少の流れが加速している [4]。このような農業従事者の減少は、地域の農業生産能力や食料供給、ひいては地域経済の維持や農業技術の継承などに

影響を及ぼすと考えられる。この減少の要因は、若者の農業離れや農業の魅力の理解不足、労働環境の厳しさなどであると考えられる。そのため、農業の現状や魅力を伝えて、世間の農業への関心を高めていくことが必要である。

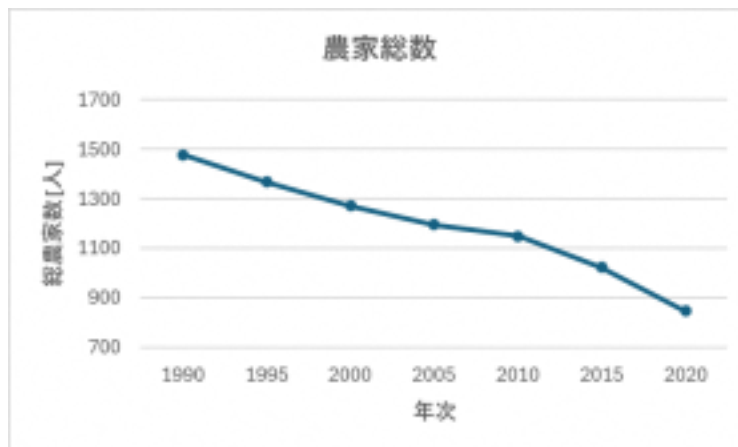


図 2 三春町内の農家総数の推移
(2024 年版三春町町勢要覧より作成)

3.2 福島県産品への関心の低下

さらに、福島県産品に対する関心の低下も重要な課題となっている。消費者庁が 2024 年に実施した「風評に関する消費者意識の実態調査(第 17 回)」によると、図 3 に示すように、放射性物質を理由に福島県等の食品の購入をためらう人の割合は 4.9%と過去最小であるものの、食品中の放射性物質の検査が行われていることを知らないと回答した人の割合は 61.5%と高い水準にある [5]。また、三菱総合研究所が 2022 年に実施した「震災・復興についての東京都民と福島県民の意識の比較」第 5 回調査によると、震災に対する意識、関心が薄れていると思うと回答した東京都民の割合は 52.4%と、半数を超えている [6]。

以上のことから、震災から 14 年近くが経過しようとしている中で、福島県産品の現状についての世間の関心が低下していることが読み取れる。福島の実状に関する情報を発信し、正しい理解を促進していくことは、福島の復興を推進する上で不可欠である。

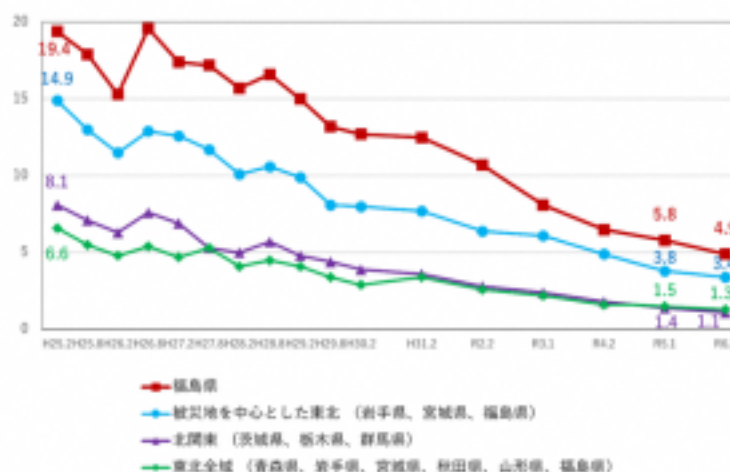


図 3 放射性物質を理由に購入をためらう食品の産地 [5]

原発事故から11年が経過し、自身の震災に対する意識や関心が薄れていると思う（SA）

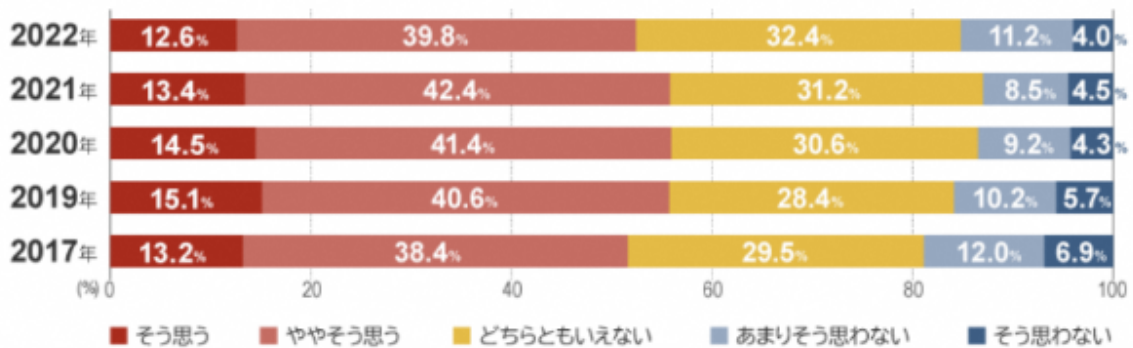


図 4 震災に関する東京都民の意識、関心 [6]

こうした現状を踏まえ、弊団体は「福島県の農業や三春町に関心を持ってもらう」ことを目的として事業に取り組んできた。

4 今年度の事業内容

4.1 貝山アグリツアーの実施

本プログラムは、福島県三春町貝山地区でしいたけ栽培を営む「ふぁーむ・わたなべ」の渡邊俊史氏の企画により、7月5日から6日にかけて実施された。本ツアーの主眼は、単なる農業体験に留まらず、三春町における震災からの復興の歩みを学ぶとともに、地域の食文化や歴史に触れることにある。特に今回は、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）からの留学生4名を迎え、地元の学生らと共に活動を行うことで、地域の魅力を国際的な視点から再発見し、発信していくための実験的な試みとして行われた。

初日は、当時三春町副町長を務めていた深谷茂氏より、原発事故直後の避難者受け入れや、独自の判断による安定ヨウ素剤の配布など、限られた情報の中で命を守るために下された「行政の決断」の重みについてお話を伺った。こうした背景を学んだ上で、午後はふぁーむ・わたなべのハウス見学や福聚寺の参拝を行い、三春の歴史と現代の農業が交差する現場を視察した。また、シイタケ菌床の放射性物質移行調査に向けた「おが粉」の仕分け作業など、科学的な復興支援のプロセスにも携わった。



図5 渡邊氏の説明を聞く大学生

二日目は、農業の実践を通じた交流に重点を置いた。ふぁーむ・わたなべのハウスにて、シイタケの収穫や菌床の管理作業を体験した。一つひとつの作物がどれほどの手間をかけて育てられているかを肌で感じ、農業の奥深さと楽しさを共有した。昼食には、自ら収穫したシイタケや、菌床を肥料として再利用して育てられたネギを用いた BBQ を行い、UCL の学生らと英語で意見を交わしながら、三春の豊かな食文化を堪能した。最後には国の天然記念物である「滝桜」を訪れ、春の華やかさとは異なる、夏の生命力に満ちた姿を視察して全行程を終えた。今回のツアーは、都市と農村、そして日本と世界を繋ぐ「アグリツーリズム」の可能性を強く示すものとなった。

今回のアグリツアーでは、参加者が農作業や地域住民との対話に深く関わることで、単なる訪問者ではない「関係人口」としての意識を育むことができた。また、海外からの留学生との合同活動を通じて、福島現状を「震災」という文脈だけでなく、豊かな歴史や循環型農業の知恵といった多角的な視点から共有できたことは、今後の国際的な発信における重要な一歩となった。

4.2 三春中学校での職場体験補助

本活動は、7月16日に三春町貝山地区の「ふぁーむ・わたなべ」で実施された三春中学校の職場体験に、東北大学の学生が同行する形で実施した。地域農業の実践現場に中学生が触れる際、大学生の視点から「福興 youth」や「My しいたけプロジェクト」の取り組みを紹介することで、次世代を担う生徒たちが地元の資源を多角的に捉え直し、農業への関心を深めるきっかけを提供することを主目的としている。

当日は、三春中学校の生徒14名と共に、シイタケの収穫や菌床の陳列、運搬といった一連の農作業に従事した。代表の渡邊俊史氏よりシイタケの規格についての解説を受けると、生徒たちは「特A」の個体を探し当てる作業に熱中し、品質選別の難しさと喜びを同時に体験していた。午前中の作業を終えた後は中学校へ場所を移し、お昼休憩を兼ねた交流の場を設けた。ここでは、昨年度完成したアプリ「My しいたけ観察日記」の実演を行い、ICTを活用した新しい農業の楽しみ方を提示した。このアプリについては、

後日生徒たちに活用してもらうことで、秋の文化祭「HARU FES」での体験発表に活かされることを目指している。



図6 職場体験中の三春中学校の生徒のみなさん

当初、中学生たちは突然現れた大学生に対して緊張の色を隠せない様子であったが、お昼休憩の自己紹介や、三春限定デザインのTシャツ、地元の「三春グルメンチ」といった身近な話題を通じて、次第に心の距離が縮まっていくのを感じることができた。説明の際には、スライドをなぞるだけでなく具体的な事例を交えて補足することを心がけ、大学生が地域活性化のために活動している意図を丁寧に伝えた。重労働である菌床の運搬作業を共に乗り越えた後の清々しい表情や、作業終わりに振る舞われたアイスクリームを囲んでのひと時は、世代を超えた連帯感を生む貴重な時間となった。

今回の職場体験への同行は、地域教育と農業振興を繋ぐ重要な試みとなった。生徒たちは、地元の農家が創意工夫を凝らして貝山の魅力を発信しようとする姿に触れ、自分たちにできることは何か、地域の農業とどう関わっていけるかを主体的に考える端緒を得た。また、大学生にとっても、中学生という多感な時期の若者に対して自身の活動を言語化して伝える経験は、地域支援のあり方を再考する糧となった。

4.3 貝山地区での交流会

8月10日から11日にかけて実施された福島県三春町への訪問は、行政、生産現場、そして地域住民が三位一体となって農業の未来を模索する貴重な対話の機会となった。今回の訪問の主眼は、ふぁーむ・わたなべで研修に従事している農林水産省職員の方々と貝山地区の皆様との交流を通じ、現場に即した農業振興のあり方を探ること、そして現在推進している「My しいたけ観察日記」のさらなる展開に向けた知見を得ることにあった。

初日に開催された三春の里でのBBQ交流会では、国の政策を担う職員の方々と、日々土に触れる地域の方々が同じ食卓を囲み、リラックスした雰囲気の中で三春の農業について忌憚のない意見を交わした。現場の生の声を直接伺うことで、地域の課題や可能性をより解像度高く理解する一助となり、非常に学びの多い時間となった。



図7 貝山の住民の方々との交流会

翌11日は、しいたけ栽培の根幹を支える菌床のゴム掛け作業に、朝礼から午後まで同行させていただいた。また、栽培技術の深淵に触れる中で、渡邊氏が菌床の状態を「しいたけの顔色」と表現されていたことが強く印象に残った。同じ品種であっても、水分や温度などの微細な環境変化によって発生の様子が刻々と変わるため、まるでしいたけの声を聞くように観察し、コントロールする繊細な技術が求められる。この「顔色＝菌床の兆候」という視点は、現在開発中のアプリにおけるコラム機能などで紹介することで、利用者の観察意欲を向上させる重要なエッセンスになると確信した。

三春町の町歩きにおいても、新たな可能性が芽生えた。アウトドアビレッジのビジターセンターで出会った「みはるまちなびカード」という取り組みは、地域を巡る楽しさを創出する仕組みとして、アプリの機能拡張に向けた大きなヒントとなった。さらに、渡邊氏が進めている食育事業のキャラクターと、我々のプロジェクトキャラクター「たけはる」とのコラボレーション案も浮上し、今後の展開に期待が膨らんだ。

今回の二日間の活動は、単なる視察の域を超え、地域資源をどのようにデジタルや教育に結びつけていくかという具体的な方向性を見出す収穫の多いものとなった。三春の歴史を伝える昭進堂での交流や、町全体の活力を肌で感じた経験を糧に、より深みのある「観察の場」を構築し、地域と次世代を繋ぐ活動を加速させていきたいと考えている。

4.4 三春シロモト市「秋の陣」出店補助

10月11日から12日にかけて実施された今回の活動は、三春町で開催された市イベント「シロモト市」への出店協力を通じ、貝山地区の特産品であるシイタケの流通と認知拡大を支援することを目的とした。これまでの活動が「生産現場」での体験に主眼を置いていたのに対し、今回は「市場・消費者」との接点に身を置くことで、貝山集落の農業が地域社会の中で果たす役割を再認識し、集落の経済活性化に向けた課題を抽出する機会とした。

初日は、ふぁーむ・わたなべにおいて、翌日の出店に向けたシイタケの袋詰め作業に従事した。熟練の技術を持つ社長のご家族から、規格に応じた袋のサイズ、充填量、識別用のテープ色といった厳密な管理手法を直接伝承された。この「出荷の最終工程」を体験することで、貝山産シイタケが持つブランド価値が、徹底した品質管理に裏打ちされていることを学んだ。

翌日のシロモト市では、店頭での対面販売を担い、多くの町民や来場者と直接対話を行った。貝山で自ら収穫・袋詰めに関わったシイタケを直接届ける中で、消費者の反応を肌で感じるとともに、新規就農者が手がけるトマトの販売支援も行い、見事完売に至った。これらの販売体験を通じて、集落の外から訪れる多様な層に対し、貝山の農産物が持つ魅力を直接訴求する「発信拠点」としての役割を遂行した。



図8 三春シロモト市「秋の陣」での出店の様子

5 今後の展望

来年度以降も、三春町外の人に魅力発信を行う活動に注力していきたいと考えている。弊団体は、地域主体の活動の補助的な活動と、弊団体主体の活動の2つの方向から発信活動を行う。具体的に地域主体の活動としては、ふぁーむ・わたなべを中心とした農業の現場に人を呼び込み、農業見学会を行うことや、三春町を代表とする観光名所である三春滝桜の観光客を対象とした出店の補助が考えられる。特にこうした見学ツアーや農作物販売のお手伝いをする際に、集客のための SNS やアプリの活用、参加者への三春町の魅力発信等をしていきたいと考えている。さらに三春町の幼稚園や保育園を対象としたしいたけ栽培を題材とした食育事業や、中学校の職場体験を通じ、次世代へ貝山の農業の魅力を伝えていきたいと考えている。

また、弊団体主体の活動としては、三春町の定期的な訪問から学ぶ地域の魅力や情報を HP や SNS 等により発信していくことに加えて、アプリの利用者が三春町の農業の現状や福島県の農産品の安全性について知ることができるコンテンツの作成、キャラクターグッズなどの作成を想定している。さらに現在構想段階ではあるが、全国各地から

人が集まる東北大学の学祭にて、ふぁーむ・わたなべのしいたけ、ねぎを用いた料理を販売することによる地域発信についても検討中である。その際、販売する商品に付加価値としてアプリの QR コードをつけることによって、購入者が食の美味しさだけでなく、生産現場の実情を知ることにもできるといった商品作成を考えており、こうした「農作物商品の販売を通じた生産現場の情報発信」という新しいプラットフォームの作成について現在検討中である。このようなアプリや HP といった情報発信コンテンツがあるからこそできる地域の魅力発信活動を中心に、さらなる活動展開の可能性についてメンバーと貝山地区の住民の方々とで協議していく。

参考文献

[1] 三春町公式ホームページ：実生プロジェクト

(<https://www.town.miharu.fukushima.jp/soshiki/27/misho-project.html>)

[2] e-Stat：令和 2 年国勢調査 07：福島県

(https://www.e-stat.go.jp/statsearch/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001136464&cycle=0&tclass1=000001136472&tclass2=000001159880&stat_infid=000032210314&cycle_fa cet=tclass1%3Atclass2&tclass3val=0)

[3] Map-It：福島県田村郡三春町の地図

(https://mapit.azurewebsites.net/Map/%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E7%9C%8C_%E7%94%B0%E6%9D%91%E9%83%A1_%E4%B8%89%E6%98%A5%E7%94%BA/highlight)

[4] 三春町：2024 年度版 三春町町勢要覧 資料編

(<https://www.town.miharu.fukushima.jp/soshiki/2/uploads/%E2%98%86%E7%94%B A%E5%8B%A2%E8%A6%81%E8%A6%A72024.pdf>)

[5] 消費者庁：風評に関する消費者意識の実態調査（第 17 回）について

(https://www.caa.go.jp/notice/assets/consumer_safety_cms103_240307_01.pdf) [6] 三

菱総合研究所：震災・復興についての東京都民と福島県民の意識の比較 第 5 回調査結果の報告

(https://www.mri.co.jp/knowledge/column/dia6ou000004w1g0-att/mtr_fukushima_202212.pdf)

謝辞

本事業に取り組み始めて3年目となる今年度は、貝山地区の住民の皆様との交流を通して、改めて三春町の人の温かさや食の豊かさを感じることができ、これらを町の外の人たちにも知ってもらうためのツールとしてしいたけ観察アプリを開発することもできました。令和5年度から本事業に多大なるご協力をいただいている、ふぁーむ・わたなべ 代表 渡邊俊史氏をはじめとする三春町貝山地区の皆様、三春町役場の皆様、および国立研究開発法人 情報通信研究機構の皆様に深く感謝申し上げます。

さらに、今年度は本事業を三春町内の中学生に向けて直接発信することもできました。本事業に関心を持っていただき、「My しいたけ観察日記」の試験利用にご協力いただいた、三春町立三春中学校の教師の皆様、生徒の皆様に深く感謝申し上げます。

以上、東北大学福興 youth の、「集落自主活動に係る伴走支援事業の業務実施報告」とさせていただきます。

令和8年2月28日

東北大学福興 youth